博物館藏版

教草
第廿一

疊表一覽

凡そ日用に供する衣食の如き人皆之を衣とし之を食して何たるを知らさるとこを其物品を改正良善にするの術に暗く従て新規の発明なく國産を繁殖せしめて各其業に就く事を知らす故に父兄たる者其子弟をして幼時より各業の大畧を知らしむることあれは他日脩産の基となるへし爰に明治六年澳國博覧會出品の際に乗し各種職業の教草を編成せしめ画圖を加へ以て童蒙に便せり然に舊版第一より第廿四まて明八年七月の火災に罹りしにより今之を再刻し兼て従前の謬誤を正し遺漏を補ひしもと雖も其圖の舊版を再刻する者の如きは鮮明ならさるあり看者之を恕せよ且我國産の多き此一部の盡す所に非す此餘の如きは以て他日に譲る

明治九年二月　田中芳男記

XB10-299
0007952393

第一 稲米 第二 糖製 第三 養蚕 第四 生糸 第五 樟虫
第六 野蚕 第七 葛布 第八 苧麻 第九 草綿 第十 織緯草木
第十一 索麪 第十二 葛粉 第十三 藍 第十四 青花紙 第十五 製茶
第十六 烟草 第十七 漆 第十八 蒔繪 第十九 蠟 第廿 白梜
第廿一 疊表 第廿二 香蕈 第廿三 製紙 第廿四 蜂蜜 第廿五 油
第廿六 臙脂 第廿七 澱粉上 第廿八 澱粉下 第廿九 褐肉 第卅 豆腐

版權所有

教草 第廿一

疊表一覽

本邦従前居宅の制上王公貴人より下平民に至る迄必畳なるものを用ひ坐起寝食とも其上に於てす畳ハ稲藁を束て長さ六尺幅三尺の長方なる状なるものを床と名くこれに席を被せて布を以て縁をとるその席を表といふ表ハ諸國より出せど就中備後表を以て称首とし其餘備前備中丹波近江尾張加賀等より出れ古備後にてハ別に大概を定め一枚の表に三尺或四五尺にて幅二間長三間までに織立るあり

其表に織る草を藺と名く即燈草のとあり又石龍芻をも通して藺と名く燈草石龍芻共に野生あれども畳表に織るものハ別に水田に植え用に供するなり燈草ハ葉緑色にして微黄を帯ぶ軟にして引断易し一葉巨くして長さ四五尺に及ぶ一葉にて畳の幅一ぱいに盈るなり然れども葉巨き故に表に製して粗にして且弱く下品とれ丹波近江等にて畳表に製するもの是なり又蒸して瓤を取り燈心とれ石龍芻ハ葉白緑色にして硬く引けども断がたし葉細にして自生のものハ二尺許に過ぎれ水田に植るものハ三四尺に至る故に畳に織るに多くハ中にて続ぎ用ゆ故に中継の名あり然れども葉細なる故畳に製して緻密にして強く上品なりとれ瓤なくして燈心にならず其外七嶋莞藁蒲莞等もみな席に織る後に詳なり

培養法

六月刈取る跡へ肥を入れ十月頃に至り結纓草を取り厚く田中に入れその田へ藺の苗を分植え苗ハ六月刈取し時根より寸許残しその根より生る新芽を八月秋分頃より掘起し他に移し置くなり翌年三月土用より四五日を經て田中の草を抜去り肥を入れ（肥ハ糞水又干鰯種粕等を用ゆ一反に二石余を用ゆべし）其後十日を過ぎ又肥を入る三度目のとき藤草を用ゆ（藤草とハ藤の葉を刈り藺田へふりこむをいふ）五月中旬頃留肥とて又肥を入る六月土用より四五日を經天氣快晴を見定め刈取なり

刈上の法

右刈取る藺を細縄を以て凡周圍一尺五寸許に束ね川池等の塘上に運致し土穴を鑿ち白き土を取り（江州にてハ青き土を用ゆ）水に溶化し右の藺を束ねるまま其内に入れ手にて數々揉み能く土をまぶり付け（これハ蟲をよけ日當のよき為なり）剛燥の地に運び一両日の間に晒し上るなり雨天にて六七日を經れバ色赤くなり下品とれ

席に織法

右の藺を取り長短を撰び（家長を備後にて引通し御書院表等に用ゆ三番を普通中下の表に用ゆ）苧糸（荒苧の根を水に浸しそれを敲き割て紡ぎたるなり江州にて皮苧といふ即黄麻のことなり）を機にかけこれを經糸とし（江州にてハ百二十二糸を用ゆ）前に撰抜したる藺を揃へ寸法に合ざるものを去り根を剪去り根本の袴（粗皮）を取り蟲蝕する葉を去り細縄を以て括り水に浸し管（指竹と云）に加へ左右へ通し藺の数十餘根織しときに糸を通し草の切断せざる様に徐々に織立るなり織畢れバ機より卸し芒毛を去り藺條を直し切藺をうちめ庭上に排置し水を噀し幾枚も重ね上に土をふりかけ澁篭にて揩込むなり是普通幅三尺一寸五分長さ一間の表を製する法なり廣間表も亦其廣狭に準じ苧糸藺草を用

七島藺

七島藺又琉球藺といふ（本琉球産なる故名く七島も薩摩の七島に多く作る故名るなり）漢名莞茎なり茎三稜にして葉なく草に似て長大なれば短葉互生し高さ四五尺に及ぶ梢に茶褐色の穗を生じ又莎草の花に似て大なり此草を以て織らるを琉球表と称し豊前豊後より多く出れ豊後の青表と称れ又伊豫宇和嶋産の松表といふも亦是なり培養法ハ熟田を墾し四月下旬に植付け七月下旬に刈取る此草ハ燈草などと違ひ茎巨き故に器械を以て割て席に織るなり備後表より下品なれども堅靱にして損じがたく民家の畳に多く用ひ又雨覆ひ荷物の上包等にも多く用ひ民用に益あること大なり

莞

莞ハ所在池澤に多し营莞といふハ陸前宮城郡利府郷加瀬村の名産なり山澤に自生するを六月初旬より下旬までに刈取り二三日の間昼ハ日乾しし夜ハ宵露に曝しくその後水に浸し一本づゝ木綿の切にてよく拭ひ絹糸又ハ木綿の糸にて四寸四方より一尺八寸四方迄に十段に編む故に十府の名あり古歌にも詠せり幅三尺以上の物ハ中継にして用ゆと云其他諸國にても織りて舩蓬等に用ゆ伊勢度會郡より多く出れ

ふな

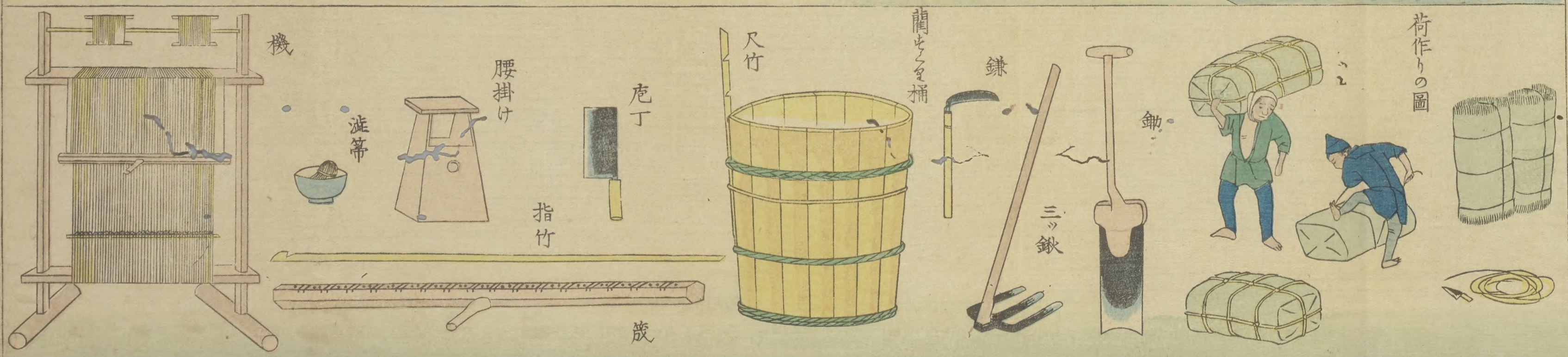
ふな（羽後酒田辺方言）一名とゞ（秋田辺方言）又をゐとも云或ハくぐともくきとうともいふ羽後秋田郡久保田の西より由利郡飽海郡辺の海岸沙地に多く生ずる草にして葉臺又莞に似て厚く粉緑色夏月葉間より穗を出し麦穗の如く三白蕋を吐く此草を刈り沙上に排列し三四日曝乾し琉球藺の如く席に織る琉球表より更に堅靱にして三年を経ても損ずることなし然れども民間自用に供するのみにして未だ他邦へ輸出することなし蝦夷にてもてんきといふて夾袋提籃等に作るものも亦同種に属れ

藁席

藁席ハ諸國田家にて織る尤江州蒲生郡にて多く織出れ經緯共に稲藁を以て織る専ら地に敷き五穀其外諸物を晒し又荷包等に用ゆるなり

蒲席

蒲席ハ蒲莞両品共に用ゆ蒲ハ葉扁にして莞ハ圓し共に池澤の辺に自生するものなり席に織りて人家縁先等に敷き夏月の用に多く供するのみなり

附録畳のことハ琉球國志畧に脚踏綿といふ文に云く屋内必布細席内裹草薦以布為縁名曰脚踏綿

明治六年一月
山本秀夫述
溝口月耕画